会員だより

農村を命のふる里に

—「米騒動」を前に—

富山県農村医学研究会　大浦栄次

今，農業は「米の自由輸入化」「米価値下げ」をめぐって維新前夜の尊皇攘夷派と討幕派のごとく賛成派，反対派入り乱れての議論が百出している。

私自身，兼業農家の一員として当然「米の輸入自由化」「米価値下げ」反対を叫ばなければならない立場にある。

が……。

先年，ニュージーランドを訪れた際，二泊三日のファームステイを体験した。

滞在二日目，使っている農薬の袋を見せてもらった。

最初，目に飛び込んできたのは「POISON」という文字である。色々表示してある部分の約三分の一ほどの面積をこの「POISON」，つまり「毒」が占めており，農薬名の LINDAEN は注意書きの文字と同じくらい小さい。

ひるがえって，日本の農薬の袋はどうだろう。農薬名がどーんと大きく，極端な場合は表示部分全体の三分の二以上を占めている場合もある。医薬用外劇物とか毒物とかいう文字は，小さくてなかなか見つからない。

昭和六十年度，「パラコートのジュース混入事件」で農薬がマスコミに大きく取り上げられた。

事件が少し下火になった冬に，懇談会などの席を利用し，農家の人や農協の職員を対象に，次のようなちょっとしたアンケート調査をした。

質問一　あなたは，パラコートを使ったことがありますか。

質問二　あなたは，グラモキソンやパラゼットを使ったことがありますか。

グラモキソンやパラゼットは，パラコートを成分として含む農薬の商品名である。だから質問二に「はい」と答えた人は，当然，質問一にも「はい」と答えるべきである。

ところが，約二百人の中の約三分の二がグラモキソンやパラゼットを使ったことはあるが，「ジュース混入事件」に使われたパラコートは使ったことがないとの回答であった。あれほどマスコミに大きく取り上げられ，有名になったパラコートと，自分たちが毎日除草に使っているグラモキソンと同じものであるとの認識がないのである。

農協職員や生産組合長の人でも，まともに回答できた人は少なかった。

今日，農薬を使わない農業は考えられないかもしれない。しかし，少なくとも農薬という化学物質が「毒」であると認識することは重要であろう。そのために，少なくとも自分たちの使っている物に対する最低限の認識を持つ努力をすべきではなかろうか。

ところで，ファームステイ先の Mr パイジは，農薬の袋を見せながら，さらに「この国では，農薬はミツバチが活動する六時から七時の間には決してまかない。ミツバチが Go home（帰宅）しているときだけまく。そうしないとミツバチが死ぬから」との言葉は，農業が自然との調和の上にしか成り立たないとの考え方を反映しており，印象的であった。

朝，出勤前にあわてて農薬をまき散らし，その農薬のまき過ぎで人間がミツバチの代わりをしているどこかの国とは根本的に違う。

以前，朝日新聞の天声人語に科学万博の際，「万博道路にカエルがひき殺されている」ことを紹介し，カエルの救出を訴えていた。

カエルは生まれ故郷に里帰りする性質があり，そのため，突然できた万博道路を越えて里帰りする途中でこの事故にあっていると述べ，イギリスでは標識を立てて二万匹を救ったなど，各国の同じようなケースでのカエル救出作戦の模様を伝えている。

二百万円のコンバインをわずか5日余りの作業後，三百六十日間眠らせておき，使っている農薬のこともほとんど知らない農家の現実。

一方では，田植え機で植え終わった田んぼに日長つかり，植え残しがないか一株，一株確認し「補植」をし，秋にはコンバインで刈り取った田んぼのわらをいちいちひっくり返し，残る生命の結晶である一筋，一筋の穂を拾い上げ作物を慈しむ。

これら農家の人たちのうち何人がミツバチやカエルを守ることが，一穂，一穂拾い上げる行為以上に，いやそれと少なくとも同じほど大切でであることと思っているのであろうか。

人間が自然の一員であるなら，まして生命を生み出す農民なら，他の生物とのかかわりにもっと注意と慈愛の目を注いでもいいのではなかろうか。

私は，農家の中にあって農家自身の意識改革こそ必要だと思う。

「米の自由化阻止」「米価値下げ反対」と叫ぶ同じ心意気で，「農薬を見直そう」「ホタルやトンボよもどれ」の運動を農民が，真剣に取り組んだとき，本当の日本の農業が始まるような気がする。

（本文は，昭和62年度毎日新聞主催の郷土提言賞に，投稿したものに加筆したものである。）